みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中国フロンティア地域における都市的集落の発生と変容：草原フロンティアの場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5512

［1］中国フロンティア地域における都市的集落の発生と変容

－草原フロンティアの場合－

小長谷有紀（国立民族博物館）

1．はじめに－中国フロンティア地域としての内モンゴル自治区

いわゆる「中原」の北側に接して広がる草原地域を、中国文明の周辺地域すなわちフロンティアとして位置づけることに大方の異論はないだろうと思われる。そこでは、古来より、匈奴、鮮卑、柔然、高車、突厥などさまざまな名を冠された諸集団がいずれも、遊牧という生産様式を基盤としつつ、騎馬による軍事力を背景にして、主役の座を交代しながら展開してきた。この草原地域において、騎馬による軍事力を最後に行使し得たのがモンゴル人である。そしてそれゆえに今日、当該地域はモンゴル高原と呼ばれており、内蒙古（モンゴル）自治区という行政域となっている。そこで、本稿では、この中国内蒙古自治区を「草原フロンティア」として措定する。

この「草原フロンティア」において、都市的集落はいかに発生し、変容し、また変容しつつあるのだろうか。そのような課題設定のもとに、論理的な整理をおこなったうえで、1つの事例を紹介することが本稿の目的である。

2．草原フロンティアにおける都市的集落の2つのタイプ

中国国内における草原フロンティアにおいて、現在では「遊牧」と呼ぶに値するような移動性の高い牧畜形式は認められない。かつてのように季節に応じて放牧地を替える目的で居住地ごと移動する、というような生活と生産の様式は、すでに20世紀半ばから衰退した。そして今日では農耕と定着的な牧畜がおこなわれている（図1参照）。

牧畜にたずさわるモンゴル族がみずから播種農耕をおこなう場合、播種農耕は漢族がおこない、牧畜はモンゴル族がおこなう場合など、主体の区別をすることによって、さらに詳細な区分も可能であるが、図1では主体の区別をせずに、土地利用に関する地域区分を示しておいた。

このような土地利用の変容が背景として存在するため、草原フロンティアにおける都市的集落の発生にも、異なるプロセスがある、と思われる。

1つは、農耕化がまず進行し、それによって牧畜そのものの定着化も進行して集落が形成され、そこから都市的集落が発生していくというプロセスと、もう1つは、農耕化という過程を経ずに機能中心としての都市的集落が発生するというプロセスである。

2－1．農耕化による定着化過程における都市的集落の発生

図1に見られるように、中国内蒙古自治区のうち、一般に「東北モンゴル」と呼ばれる東北部と、首府である呼和浩特（フフホト）を含む中央部は、「主農従牧」地域に相当する。これらの地域では、清代末期から農耕化が開始され、現在ではモンゴル牧民の生活基

盤も農業収入によるところが大きい[色音 1998]。このように農耕化が進展した地域で、やがて都市的集落が発生してくる（図２参照）。

図２は1985年当時の人口統計（表１）を用いた都市的集落の分布を示している。草原フロンティアでは、清朝時代に「盟」と呼ばれる行政域のもとに「旗」と呼ばれる複数の行政域が設定されていた。いずれも遊牧民の軍事集団である伝統を受け継いだ社会組織であり、これが空間的に固定されたものである。これに対して、農耕開発され村落が発達した地域については「旗」から一部の土地が割譲され、「県」が設定された。この歴史的経緯を反映して、中国内蒙古自治区には1987年当時、８つの盟、16の市、18の県、51の旗、３の自治旗、16の区が設定されていた。８つの盟とは別に、盟の中に含まれない市と、その下部単位としての区があり、一方、盟の中にその下部単位として県もしくは旗があった。自治旗とはモンゴル族以外の少数民族の集中している地域である。これらの行政単位のうち、市と県を便宜的に都市的集落とみなして、その人口規模に応じて大小に区分して示したのが図２である。

図２が雄弁に示すとおり、先の図１における「主農従牧」地域において都市的集落が集中している。まず、「市」については大規模、中規模、小規模の３つの都市的集落に区分して捉えるのが適当であると思われる（表１における類型①②③）。

100万人以上の人口をもつのは、首府である呼和浩特市（127万人）、今日、カシミアの工業都市として名高い包頭市（162万人）、東北部の中心地である赤峰市（384万人）の３大都市である。こうした巨大な都市には一般に「区」という行政上の下部単位を含んでおり、一部に「県」や「旗」を含んでいる。ただし、赤峰市の場合は、「県」や「旗」などの農村部を広範囲に含んで面的に広がる市域が設定されている（図２の斜線部分）。人口の集中する区部にのみ限定して人口を算出すると88万人にとどまるが、それでも100万人に近い人口を擁する、大規模な都市的集落であることにかわりはない。

続いて人口10万人以上の中規模の都市的集落が11市存在する。とりわけロシアとの国境に近い鉄道沿線部で都市的集落が発達していることがわかる。

なかには人口が１万人にも満たないほど小規模であるにもかかわらず「市」に昇格している集落もある。たとえば、モンゴルとの国境部で貿易都市として設けられた、二連浩特（エレンホト）である。これらは、農耕化の波を待つことなく、駅という特殊な機能を果たすことによって草原が都市化した事例と見なされ、次節で取り上げよう。

一方、「県」については、規模のばらつきが小さく（表１の類型④）、中央部に集中して分布している。農耕化を経て拡大する都市的集落の特徴をよく示していると言えよう。

図３は、これらの都市的集落について、人口密度という観点から、順列配置したものである。首府よりも集住している都市的集落は、４つある。まず、集寧（現・烏蘭察布ウランチャプ）市は大同の北に位置する、内蒙古自治区の南の入り口であり、通遼市は、東部内蒙古において鉄道の交差する重要な結節点であり、満州里市はロシアとの国境貿易の中心地であり、烏蘭浩特（オランホト）市は1954年まで首府であった東部の中心地である。

これらのうち、満州里をのぞくと、いずれも東西２つの「主農従牧」地域の主たる中心地であり、農耕化を経て人口の稠密地域が形成され、そこに都市的集落としての中心地が形成されていることが了解されよう。

２－２．都市化による定着化過程における都市的集落の発生

農耕化による定着化の過程を経ずに都市的集落が発生する事例は、牧畜がおこなわれている草原の中に忽然と集住地が現われるような都市的集落である。おおよそ、図１の「主牧従農」地域における都市的集落が相当する。

たとえば、上述したエレンホトと満州里のほかに、きわめて顕著な事例として錫林浩特（シリンホト）が挙げられる。ここは、清代に建設された寺院を核とした都市である。

これらの都市的集落は、20 世紀後半において大量の漢族が流入すると、人口増加にともなって多様な機能が集積するようになり、やがて周辺の人口を吸引して地域全体の定着化を推進してゆく。

先のタイプと比較すると、表２のように対比的に区分しうるであろう。

表２　農耕化プロセスの有無による都市的集落の差異

	農耕化による定着化過程における都市的集落の発生	都市化による定着化過程における都市的集落の発生
都市的集落周辺の第一次産業	農業	牧畜業
都市的集落の発生原因	農業集落	寺院建築など
定着化の原因	農業による定着化	都市による定着化

３．集合に関する２つの内在的原理

上述のような整理は、草原フロンティアで生じた都市的集落の発生を把握するうえで重要であるものの、いずれも外部世界の因子によって説明されたものである。だからといって、モンゴル族自身において集まるという内在的原理がまったく存在しないわけではない。

たしかに、遊牧という生業は、牧畜のなかでも移動性が高く、それは同時に空間分布という点ではきわめて分散的な居住を特徴とする生活をともなうものであった。しかし、そのような生活においても、人びとが集中することはありうる。それゆえに集中を意味するモンゴル語が存在する。モンゴル語において集中に関する実態をしめす民俗概念をここでとりあげておき、集中ないし集合をめぐる内在的な原理として整理しておこう。

３－１．「ホト khota」という民俗概念

「ホト」という言葉は、現在、中国内蒙古自治区では「フフホト」や「シリンホト」などのように一般的に町の名称の一部となっており、その意味でまさに「都市的集落」の意味として確立している。また、モンゴル国では一般的に「ホト」といえばウランバートルのことを意味する。むしろ、日常会話ではウランバートルと名前を言わずにホトと言うことによって首都を指すのが普通である。いずれにせよ、人びとが集住する地点を表現する言葉になっている。

しかし、家畜とともに生活している人びとのあいだでは「ホト」の原義が生きている。そこで用いられている「ホト」とは、宿営するたびに存在する「家畜の寝床」である。必ずしも、何らかの物質的な基盤があって囲われているとは限らない。固定的な施設の有無にかかわらず、日帰り放牧から帰って来た家畜が休む場所、それが「ホト」と呼ばれる。

宿営は、ゴビ砂漠地域をのぞいて、たいてい数軒の家庭が集まっておこなう。概して、モンゴル国西部やチベット高原では、宿営地集団を構成する戸数は多く、したがって家屋数も多い。一方、モンゴル国中央部から東部にかけては、せいぜい４～５軒の家が集まっている程度である。こうした複数の戸数が集まって宿営している状態を「ホト」と呼ぶ。

民主化直後のモンゴル国中央県での調査によれば、この「ホト」を構成するメンバーは10年間四季節の計40回のあいだ一度として同じではなかった。すなわち、私たちがイメージするような「村」ではなく、季節移動をするたびに、「ホト」は場所が変わると同時に、それを構成するメンバーも激しく入れ替わりうる、という特色をもっている。

ただし、中国内蒙古自治区ではモンゴル国に比べてはるかに人口密度が高く、定住化政策も強力である。そのため、宿営地集団は、固定家屋に住み、メンバーもすでに固定的で、小さな「集落」とよびうる存在と化している。

以上のように、地域的な差異があるものの、基本的に「ホト」という民俗概念は、そもそも牧畜という生産活動のための一時的な集合形式であったこと、これが共同体の意味となり、さらに地縁的に固定してのち「町」の意に転化したこと、が了解されるであろう。

３－２．「フレーkhurie」という民俗概念

「フレー」という言葉は、中世に遡れば「クリエン kurien」という言葉として登場し、円陣形態を示すこと、と同時に大会議の意味であったことがよく知られている。すなわち「クリエン」とは、軍事や行政などのサービス機能を果たすために一時的に人びとが集まることを意味し、そしてそのとき集まった形式が円陣であることを反映して、円陣を意味していたのである。

17 世紀以降、モンゴル高原にチベット仏教が本格的に広く普及し、草原の各地に寺院が建設されるようになると、それぞれの寺院は「スム sum・ヒード khiid」と呼ばれ、それらの建築群の囲いが全体として「フレー」と呼ばれた。当初は、寺院の周辺に僧たちがゲル

（移動式天幕）を円形に配置していたからであろう。やがて、必ずしも円形でなくても、寺院建築の囲いが「フレー」と呼ばれる。ただし、後述するように、シリンホト市の貝子廟の場合は「３つの四角形の赤いフレー」と呼ばれており、「フレー」の語に「四角形の」という形容詞が付けられていることから伺われるように、「フレー」そのものは基本的には四角形ではないこと、つまり円形という概念を含みもっていたであろう。

モンゴル国の首都ウランバートルはかつて漢文資料には「庫倫」と記されていたが、これは「フレー」の音訳である。庫倫は一般に「イフフレー」すなわち「大フレー」と呼ばれていたのに対して、「バガフレー」すなわち「小フレー」と呼ばれていた寺もある。現在の中国内蒙古自治区東ウジムチン旗内にあった「ラマのフレー」と呼ばれていた寺である[布和哈達 1999：27]。

このような宗教的な機能中心であった場合のほかに、それ以前の軍事集会の場合など、集合する目的の違いはあるものの、いずれの場合も人びとを統合する目的をもった、あるサービス機能の中心地に人が集まること、それが「フレー」ということばが用いられる場合に共通している。

上述のような２つのモンゴル語を手がかりにして、モンゴル族にとって内在的な集中の原理を対比的に理解すると次のようになる。

１つは、牧畜作業上の協業体制として人は集中するという原理である。この場合は、日常的な作業であり、常に存在するが、恒常的に固定されたメンバーではない。「ホト」は生産の現場として存在している。

もう１つは、牧畜作業以外の目的で人は集中するという原理である。この場合は、非日常的な作業であり、本来、きわめて臨時的な集中である。しかし、そうした軍事、宗教などサービスの機能を担う「フレー」は、施設が固定化することによって都市的集落へと発展する。

以上を対比的に捉えると表３のようになるであろう。

表３　ホトとフレーの概念的な対比

	ホト	フレーないしクリエン
原義の形態 （社会的意味）	家畜の寝場所 （宿営地集団の空間）	円陣形態 （会議）
集合の原理	生産活動の合理化をはかる	集団の統合をはかる
固定化の初期形態	生産活動のための 集落	サービス機能のための 寺院建築

この模式的な理解の枠組みは、先に示した枠組みと呼応している、と見てよいであろう。すなわち、草原フロンティアにおいては、「農村集落の発展型」の都市的集落と、「サービス機能中心」としての都市的集落との二種類が発生しており、モンゴル語の概念を対応させるならば、前者は「ホト」的、後者は「フレー」的、とそれぞれ対応させて呼んでも差し支えないであろう。

にもかかわらず、興味深いことに、フレーという概念と対応する事例として挙げた都市的集落はシリンホトやエレンホトなどであり、いずれも「ホト」という語を地名化させている。これらの都市的集落について、発生時に認められる類型が、必ずしも実態としてそのまま敷衍できないことを意味している。換言すれば、都市の本質的な変容があったという可能性を示している。そこで、１つの実例としてシリンホトをとりあげ、どのように都市的集落が発生し、また変容したかを確認しよう。

４．シリンホト市－都市化による定着化の事例として

４－１．都市的集落の発生：シリンホト市の成立

草原フロンティアにおいて、農耕化を経ることなく都市的集落が発生する契機となったのは、清代乾隆８（1743）年に建立されたチベット仏教寺院「崇善寺」である。シリンゴル川の流れる盆地のほぼ中央に小さな丘があり、そこに有名な「13 オボ」があった。オボとは土地神のよりしろとなる塚で、当地のそれは13体が一直線に並んで壮大であった。この丘の南側のゆるやかな斜面に寺院は建設された。

当該地域を支配していたモンゴル人貴族は、清朝から貝子の爵位を得ていたため、その所轄域は「貝子旗」と呼ばれており、それはすなわち彼らの天幕から成る中心地の名称でもあった。そこに建設された寺院であるため、崇善寺は俗に「貝子廟」と呼ばれていた。

建立当時は、１つの堂にすぎなかったが、20 世紀半ばには６つの堂を擁するまでに建築物が集積しており、その全体は「３つの、四角形の赤い囲い（フレー）」と呼ばれていた。

20 世紀初頭に当該寺院を調査した長尾雅人によれば、中央に崇善寺（大廟）を配し、その北に慶善寺があり、それらが１つの囲いで囲まれており、同様に東西にも囲いがあり、それら３つの囲いのほかにさらに周辺に倉庫や僧坊などの小さな囲いが併設されて、合計７つの囲いから成っていた[長尾 1992（1947）：95]。

70～80 歳代の高齢者の聞き取りによれば（添付資料を参照のこと）、これらの「囲い」の地区からおよそ 500 メートルの範囲内に「東商」「西商」と呼ばれる地区があり、一種の商業地区が形成されていた。ただし、その規模は決して大きくはない。東商は張家口からの商人が食料品や日用雑貨を販売する地区であり、西商は北京からの商人が少し高級な品物を販売していた地区であった。双方ともに、モンゴル風の天幕（ゲル）の中での販売が許されており、固定家屋を建設して居住することは許されていなかったと言う。数軒のゲルがあるばかりであったが、やがて彼らはモンゴル族の遊牧民たちのところへ出向いてその畜産物を搬出するようになり、それらの畜産物を収容する施設として倉庫の建設が認

められるに至り、いよいよ固定的な商業地区へと展開した。先述の長尾によれば、昭和 18（1943）年の段階では、固定家屋であったことが知られる[長尾 1987（1947）：45]。

「囲い」の外には、数キロメートル離れた位置に、アバハナル旗政府が衛門（役所）として数軒の天幕を張っていた。また、満州国の成立後、徳王の自治を支援するという名目で日本の陸軍特務機関があり、善隣協会、興蒙中学校、大蒙公司、蒙彊銀行の貝子廟支部、も寺院から４～５キロメートルの範囲に設置された。

このように、20 世紀前半までのシリンホトは、寺を中心にした小さな商店街と、軍事関連施設の２拠点から成っていた。平坦な草原の中に寺院をはじめとする建造物が突出するという風景が展開していたのである。まだシリンホトとは呼ばれず、寺院の名称もしくは寺院を構成する建造物の総称で呼ばれていた。

４－２．都市的集落の変容：シリンホト市の拡大

1949 年に中国全土が解放されるに先立ち、内蒙古自治区はいち早く 1947 年に自治区政府が成立し、社会主義化がすすんだ。チベット仏教に殉じる僧たちの存在は、宗教をアヘンとみる社会主義的立場からは許されず、まず、何らかの生産活動に従事することが強いられた。そこで、彼らが試みたのは、医療、裁縫、製紙などであった（添付資料を参照のこと）。

医療行為は、ラマ僧のなかでもこの部門の専門家たちが従来から信者に供せられていたサービスである。一方、裁縫はラマ僧同士のあいだで得意とするものが供していたサービスであり、これを産業化する試みとしてフレー（囲い）内に工房が作られたという。また、製紙はもともと経文という印刷物を消費していたラマ僧たちが、その生産に携わろうとする試みとして印刷作業所がフレー（囲い）内に作られたという。

従来からのサービス業であった医療に加えて、新たに工業的な生産活動がフレーの中で開始され、それらが手狭になると、フレーの外へと脱出が始まった。すなわち、工場建設の始まりである。

ちょうどその頃、1952 年、シリンホトという名称が使われるようになる。すなわち、20 世紀の後半から、フレーはホトへと名称が変わった。と同時に、サービス機能中心から生産現場へと転換した。工業は 20 世紀を牽引する産業であり、その生産地へと転換したのである。ある特定の機能中心というフレー的な集中原理から、生産のために集まるというホト的な集中原理へという転換は、まさしく都市的集落の名称の変遷と整合性をもって呼応しているとみてよいであろう。

その後、1983 年、シリンホトは鎮から市へ昇格し、シリンホト市は「草原の真珠」と称されて発展を始める。図３に見られるように、1985 年の時点での人口密度は最下位であり、人口の周密する都市的集落としてはきわめて初期的な段階にとどまっていた。農耕化を経ない地域のなかで、交通路の結節点ではないにもかかわらず、都市的集落が発生する事例である。その意味で、まさしく「草原フロンティア」における都市のありかたを体現して

いると言えよう。

まばらに人が住む地域のなかにあって、シリンホト市は徐々にその市街地を拡大していく。図４のように、現在の市街地は文化大革命開始時の３倍程度に拡大した（図４参照）。ちなみに、筆者が初めてシリンホト市を訪れた 1985 年当時、草原部との境界地に立地していた外国人用のホテルは、2004 年現在、市街地の中に埋め込まれてしまった。

こうした市街地に居住する人口のおよそ７割が漢族である。市街地の発展は、周辺の草原部とりわけ乾燥化が著しく牧畜の成立基盤を失いつつあるチャハル地方からのモンゴル族の移入よりもむしろ、圧倒的な量の差をつけながら、漢族の移入をもたらしている。モンゴル族にとって宗教サービスの機能中心であった都市的集落は、今日、漢族の生産活動の場所としての性格をもつべく変容したと言っても過言ではないであろう。

５．最後に－都市的集落の未来

草原フロンティアにおける都市的集落の発展は、農耕化を前提条件とするか否かによって歴史的に２つの流れで理解することができる。そのうち、農耕化を前提条件とせずに発展した流れは、草原フロンティアとしての特徴をより明瞭に反映したプロセスであると考えられる。

ただし、その事例に依拠するならば、そうした特異性は、結局のところ 20 世紀後半の変容のなかで失われていく。農耕化を経てきた都市的集落と同様に、20 世紀を牽引する産業の生産現場となってきたからである。

しかしながら、将来にわたっては、両者のあいだにみられる規模の違いが大きな意味をもつようになるであろうと思われる。農耕化を経てきた都市的集落とそうでない都市的集落とのあいだでは、背後にもつ人口規模がまったく異なり、都市規模も異なる。前者が圧倒的に大きい。この違いは今後、どのような発展の違いをもたらすであろうか。

とりわけ重要な問題として認識されているのは、都市格の付与（municipality）という政治上の操作である。すでに 1987 年の時点で広大な行政域をもつ都市として確定されていた赤峰市と同様に、近年、中央部の南の伊克昭盟がオルドス市という行政単位に変換された（図２参照）。このような都市格の付与という政治上の操作は、モンゴル族の自治権が保証された地域からの離脱を意味している。すなわち、一都市として独立することによって民族政策の対象からの切り離しがおこなわれている、と見られている[Bulag 2002]。

農耕化を経てきた都市的集落をもつ地域では、盟域全体が都市として昇格し、第一次産業からの脱却が試みられている。今後ますます第二次産業の生産現場と化し、中国の中の先進地域がもはや「世界の工場」を脱しているなかで、こうした地方都市こそは「世界の工場」を具現化してゆくであろう。

一方、シリンホト市はあいかわらず、盟の中心地にとどまっており、また盟全体が市として行政的に昇格するとは現地ではまったく考えられていない。それどころか、盟の最大の資源は、草原であるとみなされるようになっている。ウジムチン羊という在来種が国際

的な評価を得ている今日では、現地でも、もっぱら第一次産業に地方発展の契機があると見なされており、また内蒙古自治区で唯一と言ってよいほど、草原の風景と遊牧らしい暮らしが残っているウジムチン旗は、観光資源と見なされている。あくまでも経済的発展という見地から、シリンホトは「草原の真珠」でありつづけるであろう。

このように、草原フロンティアでは、歴史的経緯の異なる２つの都市的集落群が今後も都市とは何かを考察するうえで重要な異なる動きを見せると思われる。

謝辞　本稿を作成するにあたって、シリンホト市出身の包慕萍さん（東京大学生産技術研究所）より、地図資料についてご教示いただきました。記して感謝します。

参考文献

長尾雅人 1987『蒙古ラマ廟記』　中公文庫　（初版は『蒙古喇嘛廟記』1947　高桐書院）

長尾雅人 1992『蒙古学問寺』　中公文庫　（初版は『蒙古学問寺』1947　全国書房）

錫林浩特市志編集委員会　編　1999　『錫林浩特市志』

錫林郭勒盟誌編集委員会　編　1999　『錫林郭勒盟誌』

錫林浩特文化史資料研究委員会　編 1990『錫林浩特文化史資料集第一集』（モンゴル語版）

錫林浩特文化史資料研究委員会　編 1997『錫林浩特文化史資料集第二集』（モンゴル語版）

色音 1998『蒙古遊牧社会の変遷』内蒙古人民出版社

那・布和哈達　編 1999『錫林郭勒寺院』（蒙古族蔵伝仏教寺院大全４）

Bulag E. Uradyn 2002　'From Yeke-juu league to Ordos municipality: settler colonialism and alter/native urbanization in Inner Mongolia'　"*Provincial China Vol.7, No.2*" pp.196-234

図１　内蒙古自治区における土地利用区分　『内蒙古国土資源地図集』（1988）より

図２　内蒙古自治区における都市的集落の分布　『内蒙古国土資源』（1987）より

図３　内蒙古自治区における都市的集落の人口密度ランク　『内蒙古国土資源』（1987）より

図４　シリンホト市の拡大　『中国都城市地図集』（1994）より

表１　1985 年の人口統計における都市的集落

表２　農耕化プロセスの有無による都市的集落の差異

表３　ホトとフレーの概念的な対比

表１　1985年の人口統計における都市的集落

	都市名	土地面積（K㎡）	人口（万人）	人口密度（人/K㎡）
①	呼和浩特市	6076	126.58	208.3
①	包頭市	9991	161.98	162.1
②	烏海市	2350	26.6	113.2
②	海拉尔市	1286	18	140.0
②	満州里市	296	16.6	560.2
②	牙克石市	27590	39	14.1
②	扎蘭屯市	16800	38.9	23.2
②	烏蘭浩特市	781	19.2	245.7
④	突泉県	4800	29	60.4
②	通遼市	361	25.3	700.8
③	霍林郭勒市	584	2.9	49.7
①	赤峰市	84361	384	45.5
②	東勝市	2200	12.1	55.0
②	錫林浩特市	18750	10	5.3
③	二連浩特市	126	0.7	55.6
④	多倫県	3700	9.4	25.4
②	臨河市	2520	36.5	144.8
④	五原県	2596	23.7	91.3
④	磴口県	4166	9.4	22.6
②	集寧市	114	16.3	1429.8
④	武川県	4885	16.4	33.6
④	和林格尔県	3410	17.5	51.3
④	清水河県	2859	11.5	40.2
④	卓資県	3190	23.5	73.7
④	化德県	2562	15.5	60.5
④	商都県	4353	33.2	76.3
④	興和県	3499	28.9	82.6
④	豊鎮県	2574	29.5	114.6
④	凉城県	3455	23.2	67.1

表２　農耕化プロセスの有無による都市的集落の差異

	農耕化による定着化過程における都市的集落の発生	都市化による定着化過程における都市的集落の発生
都市的集落周辺の第一次産業	農業	牧畜業
都市的集落の発生原因	農業集落	寺院建築など
定着化の原因	農業による定着化	都市による定着化

表３　ホトとフレーの概念的な対比

	ホト	フレーないしクリエン
原義の形態（社会的意味）	家畜の寝場所（宿営地集団の空間）	円陣形態（会議）
集合の原理	生産活動の合理化をはかる	集団の統合をはかる
固定化の初期形態	生産活動のための集落	サービス機能のための寺院建築

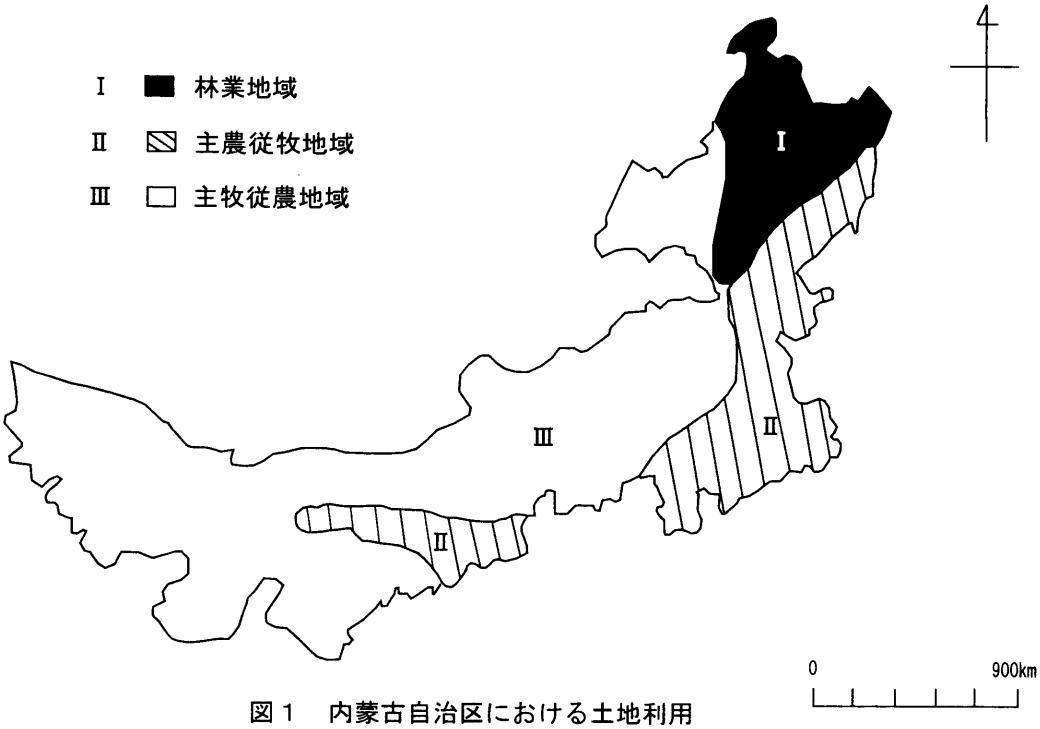


図１　内蒙古自治区における土地利用

（児玉香菜子作成）

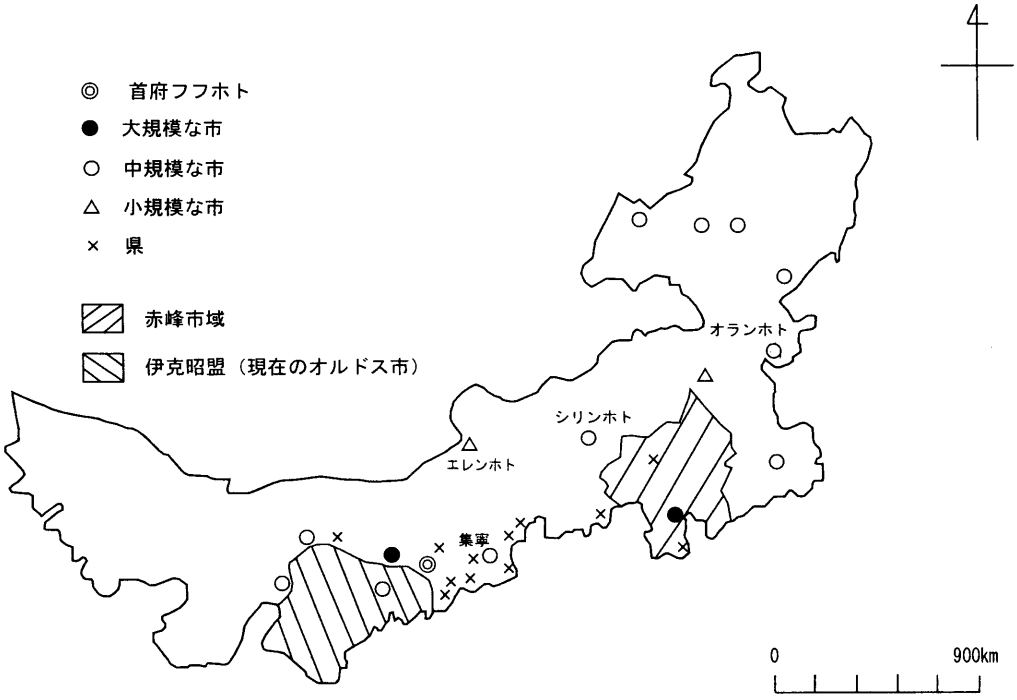


図２　内蒙古自治区における都市的集落

（児玉香菜子作成）

图4

锡林浩特城市建设用地扩展图

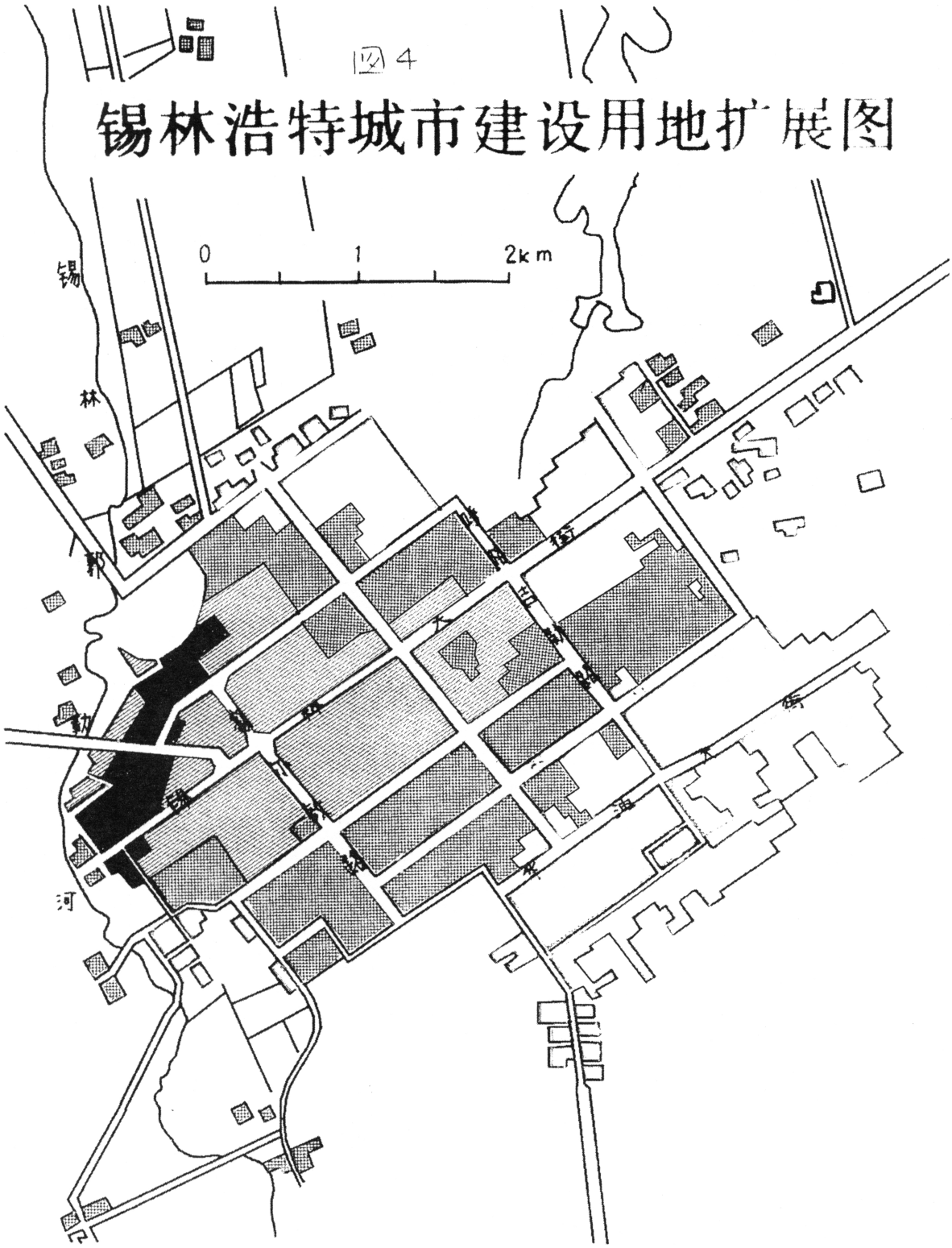
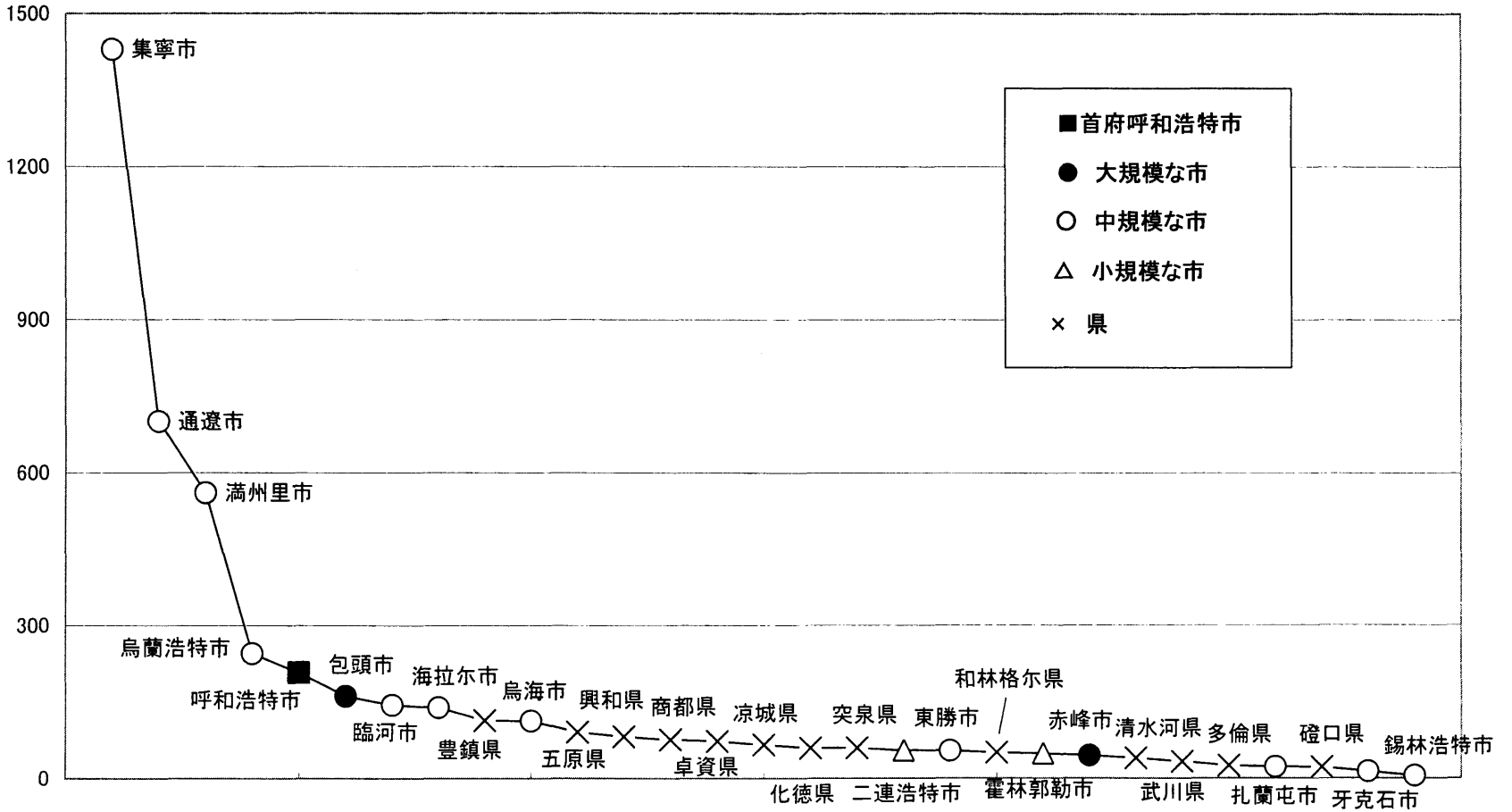


図3 内蒙古自治区における都市的集落の人口密度ランク 1985年



（児玉香菜子作成）

添付資料その１

ザンバルマーさんは戌年生まれ、八三歳。一九二二年にモンゴル国スフバートル県のダリガンガに生まれた。兄弟は一二人で、男の子が六人と女の子が六人だった。ザンバルマーさんは兄弟のなかでは十一番めで、女の子のなかでは五番めで、下に妹が一人いる。父親の名前はツゥルトゥムだったが、シリーンゴルに来て四年経った一九三五年に亡くなった。聞き取りは2004年2月に彼女の自宅でおこなった。

わたしがダリガンガにいたときはアルタン・オヴォー、アスハティーン・オール、アヴダルティーン・オール、アヨダルなどで遊牧をしていました。一九三一年の冬は、アヨダルというところで越冬していましたが、二月二日の日暮れころ、三頭のラクダに荷物を積んで、数少ない馬を追って出発しました。ほかの家財道具や家畜はすべて残しました。

速く行くことを考えてラクダの荷積みも軽くしたつもりでしたが、ラクダの歩みが遅いので、途中から荷積みのラクダも捨て置くことになりました。わたしは最初、荷積みのラクダに靴も靴下もないまま乗せられていましたが、ラクダを捨て置くことになったとき、父はわたしを荷物のなかから抜き出して裸足のまま懐のなかに入れようとしました。しかし、わたしはもう十歳でしたので大きすぎて無理でした。それで、父はモンゴル服の裾を縛り上げてそのなかにわたしの足を入れてわたしを抱きかかえ、馬に相乗りしました。父と交代で兄はわたしを背中におぶって馬を走らせました。誰かの馬が疲れれば、兄は別の馬を捕まえて交代させていました。その作業の間は父がわたしを抱きかかえていました。

一晩中そのようにして馬を走らせて、朝、日が出るころに国境を越えました。「国境を越えた」と言って父と母は故郷に向かって拝んでいました。わたしは自分が迷惑になっていたと思っていたのか、「わたしを放置して行きなさい」「わたしを放置してみんな軽くして行きなさい」と泣いて頼んだのを覚えています。

そこからは止まらずに進んで、昼過ぎにアバガ旗の北側のとある家に入ってお茶を飲み、しばらく南へ進んでからそこに留まり、アバガ旗（中心地）で春を過ごして、初夏の六月にはゲゲーン・スゥム（貝子廟）の近く、今のシリーンホト（市中心地）に来ました。三人の兄、三人の姉、父母、それにわたしと九人でここに移動してきました。

――なぜこちらに移動してきたのですか。

ロシアの赤い党が入ってきて領主やラマ僧を殺しはじめていると、そして、男の子とたちを全部軍に強制連行していると、そう聞いてそれを恐れ、逃亡することを決心しました。わたしの一人の兄がラマ僧でした。彼にラマ僧のまま無事に生きてもらいたかったのです。それにわたしの家は男の子が多かったので、軍隊に強制連行されることも恐れてこっちに逃亡してきたそうです。

アバガ旗（中心地）で春を過ごしていたときに父は着てきたクロテンのデール（モンゴル服）でゲル（フェルトの天幕）を一軒交換しました。思うに、そうとう値打ちのある

デールでしたね。一着のデールでゲルを一軒交換できるとは。それで、ゲゲーン・ヒード（貝子廟）の近くにきて、兄をゲゲーン・ヒードのラマ僧にさせてもらい、わたしたちはよその家の家畜を放牧してなんとか生計を立てました。

わたしたちはゲルをもつようになってからアバガ旗から商人の車に荷物を運んでもらって、ゲゲーン・ヒードの北側にゲルを立てました。ゲゲーン・ヒードの周辺には人家が少なかったです。寺の西南にはベージン・マイマイ（北京の商社）と呼ばれる十数軒のゲルがありました。寺の東北にはジンジコー・マイマイ（張家口の商社）と呼ばれるゲルも数軒ありました。ゲルの中に木製のカウンターを設置して品物を売っていました。倉庫は固定家屋でしたが、その他は全部モンゴル・ゲルでした。

寺の近くには善隣協会という機関もありました。そこには数人の日本人がいました。それに大蒙公司という商社がありました。また、徳王（デムチュグドンロブ王）の軍事施設がありました。軍の駐屯地は寺の東南にありました。わたしは十八歳のとき、一九三九年に徳王の軍隊の上佐だったナムダグという人と結婚しました。ナムダグは西スニド旗出身でしたので、わたしは西スニド旗に行って結婚式をあげて、またゲゲーン・ヒードにもどってきて軍の駐屯地に三年間いました。ナムダグは上佐から連隊長になりました。ナムダグは連隊長と呼ばれていました。わたしたちが住んでいた軍の駐屯地からは東商（東の商店街）のほうが近かったのですが、わたしたちは馬に乗って西商（西の商店街）に行くことが多かったです。西は北京の商社でしたので品物が豊富でした。品物も良質です。軍の駐屯地から、その西の商社街までは草原でした。それほど遠くはありませんでした。

一九四一年に軍の駐屯地にいたとき、初めての子供になる長女のナムジルツォーが生まれました。自分の家での出産でした。助産婦を家に呼んできて赤ん坊を包んでもらいました。軍の駐屯地に三年間いて、その後、一九四三年に西スニド旗に移って、ナムダグの家に住みました。ナムダグは軍官でしたので、行ったり来たりしていました。そうこうして三人の娘が生まれました。チョールマー、エルデニツェツェグ、ソドノムジドの三人の娘は父親の故郷の西スニド旗で生まれました。

一九四九年ころだと思います。ある夏、漢人部隊がナムダグを連れていきましたが、エレーン・ホトを過ぎたところで、ザミーン・ウーデ（モンゴル国側にある国境の町）の手前で殺しました。いったい何の罪なのか、わかりませんでした。こうして夫が死んでしまったものですから、わたしも西スニド旗に住むのをやめました。一九五〇年に四人の子どもを連れて、車に荷物を積んで、数頭の牛を追ってゲゲーン・ヒードの近くにいた母親のところにもどってきました。寺にいたラマ僧の兄も一緒に住んでいました。

こうして子どもたちといっしょに母のところにいたとき、ダンザンという男が軍隊からもどってきました。彼は家族のいない一人ぼっちで馬の番をしていましたが、わたしの家に来て知り合ったので、彼と結婚しました。ダンザンと結婚してもう一人の娘が生まれました。エルデニチメグという名前です。これで五人娘になったので、早く男の子が欲しくて姉の娘から男の子ジャムバルドルジを養子にしました。彼はほんとうに男の子を連れ

てきてくれました。その後、ずっと男の子が四人生まれました。ジャムバルドルジの次はリンチンドルジ、その次はウルズィツェンゲル、その次はウニルバヤン、そして末っ子のソヨルツェンゲルが生まれました。ソヨルツェンゲルを産んだとき体調がよくなかったので、二番目の娘であるチョールマーに引き取ってもらいました。

わたしはこのように男の子五人と女の子五人の、十人の子どもがいます。産んでいるうちに、わたしは自分で自分の助産をするようになりました。赤ん坊を包む布や鋏、お湯などを用意しておいて、自分で赤ん坊のへそを切って布に包むようにしていました。末っ子のソヨルツェンゲルは町で生まれました。体調が悪かったので助産婦を呼んでみてもらいましたが、助産婦は「まだですよ」と言って去ってしました。助産婦が去ってから陣痛が始まりました。ダンザンがその助産婦を呼びに行く間に生まれましたので、また自分で助産したのでした。リンチンドルジとウニルバヤンのときも自分ひとりで産みました。

赤ん坊が生まれてからは一ヶ月の産休を取ってよく休まなければなりませんが、モンゴル・ゲルの中ではカーテンを引いて風が当たらないようにして二、三日家を出ません。三日経てば頭に布を巻いて風に気をつけながら家事をしはじめます。乳搾りもします。三日以内は外部の者が部屋に入ることは禁止されています。遠くから来た人も近所の者も赤ん坊がいるところに入ってはいけません。家庭によっては赤ん坊が生まれたあと竿に赤い布をつけてゲルの入り口の前に差し込むことがあります。それを見た人はこの家は立ち入り禁止であることがわかって、中に入ろうとしません。しかし、わたしの家は赤い布をつけたことがありませんでした。赤ん坊が生まれて三日経ったあとは赤ん坊のお祝いの食事をするために近所や兄弟、親戚を呼び集めてお茶を飲ませます。そのとき、産婦は赤ん坊のことがあるので、起き上がって炊事をしなくて横になっていてもかまいません。座っていても結構です。元気な人は起き上がって炊事をして客を接待することもあります。

――「文革」のときはどのように過ごされましたか。

「文革」のときはたいへん苦労をしました。その前は牛が結構増えていたので、まあまあ家畜の数も増えていました。一九五八～一九五九年ころは高級合作社になるといって私有の家畜を公有のものにしました。ヒツジ五匹、雄ウシ一頭、乳ウシ一頭を残してあとはすべて公有のものにしました。それで、公有のウシの番をするようになりました。一九六六年に「文革」が始まったとき、わたしは金持ち軍官の夫人だったとして糾弾され、ダンザンも金持ち軍官の夫人だったのを知っていながらそんな人と階級の境を明瞭にしなかった、として糾弾されました。

それでわたしたちが世話をしていたウシの群れも没収されて、わたしたちは他人のお手伝いをするようになりました。よその家を手伝って乳搾りをしたり、羊毛を刈ったり、また、家畜の出産を助けたりしました。他人の家がやらせる仕事は何でもやりました。のちにはゲゲーン・ヒードとツァガーン・オヴォーの間にあるデルセン・オスというところの、土木工事現場に移っていきました。ダンザンは泥や土を扱う作業に加わり、わたしは

その作業のための水を汲む仕事をしました。

「文革」が終わって、名誉回復をされてからは公有のヒツジの番をするようになって、やっと人と対等に付き合うことができるようになりました。

とくに持病はなく、元気です。七〇歳になった年に臀部の麻痺症にかかって一年あまり臥せっていました。ほかに大病を患ったことはありませんね。

添付資料その２

ガルサンポンツォングさん、七十一歳。聞き取りは2004年２月に貝子廟でおこなった。

一九三三年に内モンゴルのヒシグテン旗に生まれました。一九三八年、五歳のときにゲゲーン・ヒード（貝子廟）に来てから故郷にもどったことがありません。昔からゲゲーン・ヒードにはヒシグテンからのラマ僧が一人常住するという習慣がありました。私の祖父の弟がゲゲーン・ヒードにいたので、わたしはそのラマ僧のおじいさんを頼りにやって来ました。

そのころ、このあたり（貝子廟周辺）は何もありませんでした。周辺二十キロのところから見えるのはオヴォーとお寺だけでした。この寺には赤い色の三つの囲いがありました。お寺の右と左側にラマ僧たちの住居である固定家屋がありました。左側の囲いには住居がたくさんありました。空間が広がっていました。右側は少なかったです。なぜなら、その向うにシリン川が流れていたので、それ以上広げられませんでした。

当時、日本人もたまに見かけました。日本人が住んでいたのは、丸い窓のついた塔のある、数件の固定家屋でした。一九四五年に日本人がそこを離れたとき、その建物を全部焼いて行きました。しばらく煙が立ちのぼっていました。日本人はゲゲーン・ヒードに来て九年経ったといわれています。おもうに、一九三六年に来たでしょう。

そのとき、日本の特務機関というのが現在の第一発電所の右側にありました。そこでは映画が上映されていると聞いていました。わたしたちは見に行ったことがありません。徳王（デムチュクドンロブ王）が来て大宴会をしたあと、その夜は映画が上映されていました。外の壁に白い布をかけて映画が上映されたそうです。徳王が来てシリーンゴルの十のチョールガーン（盟）のナーダム祭を催していました。盟公署は現在の第二発電所の位置にありました。

一九五八年に、寺の家畜を売却したお金などによって集められた資金で絨毯工場が創られました。これがシリーンホトの最初の工場でした。お寺の近くに建てられました。ラマ僧が自給自足をする政策が行われていたのです。一九六〇年から絨毯工場は国営工場になりました。「国営地毯廠」と命名されるようになってラマ僧たちが投資した金を返してくれました。その後、一九七〇年代から毛織物工場になりました。現在もモンゴル医学研究所の隣にあります。

わたしはもともと絨毯工場で働いており、その後も国営毛織物工場で働くようになりました。

一九六六年から糾弾されて、以来十年あまり政治的権利を奪われていました。そのときは勤務時間に自分の仕事をして、勤務時間以外は別の仕事をしていましたので、休みがありませんでした。一九七七年にようやく「罪人」のレッテルが払い落とされました。というのは、わたしはそのときよく働いていましたので受賞されることになりました。それで、

わたしは「この賞をわたしがもらうわけにはいきません。わたしは政治的悪評のレッテルを貼られている人物です」と言いました。これを聞いて彼らはわたしの名誉回復を忘れていたことに気づき、その悪評のレッテルを剥がしてくれました。その後、わたしは一九七九年から一九八九年まで働いて退職し、一九八九年からまたゲゲーン・ヒードに来て宗教活動をしました。寺には自主的にもどって来ました。

ゲゲーン・ヒードのマムバ・スム（医学院）では、かつて一九四〇年に西スニドに病院をつくり、張家口から十八頭のラクダに薬や器材などを運んできました。当時は約三十人のラマ僧医者がいました。一九四五年に病院が破壊されて営業停止になりました。しかし、薬や器材がそのままあったので、それを一九四七年から四八年の間に全部回収して三つに分けて、一部を軍に、一部をアバガ旗に、もう一部を寺に分けました。寺に分けてもらった一部を利用して寺にラマ僧病院がつくられました。それでラマ僧が寺で治療をしていました。一九五八年に二十二人のモンゴル民間医の薬を合わせて合作社がつくられました。一九七九年に寺の病院を復活させました。

ラマ僧たちが絨毯工場をつくりました。また、各旗からラマ僧たちが来て製鉄工場をつくりました。のちにその工場はなくなりました。電気工場にも数人のラマ僧が働いていました。この工場も二年ほどで消えました。ラマ僧たちは寺で製服工場を創って服装を造っていました。服装はチョイルの左側の建物でしかつくりませんでした。ラマ僧たちが縫ったり繕ったりしていました。その後、ラマ僧たちの製服工場を服装工場と合弁させました。絨毯工場を毛織物工場に合弁させました。そこには銀細工の職人が来て銀で物をつくっていました。それも文革中になくなりました。寺の牛車で塩を運んで売り、小麦粉などの食糧を運んできていました。

一九四五年にロシア軍が来たとき、各旗の家畜を追っていったときに、モンゴル人に家畜を追わせました。たまに、あるモンゴル人を日本のスパイとして連行していくこともありました。それ以外にモンゴル人は連行されませんでした。ここにいた漢人は全員連行されました。